特集Ⅰ　ヨーロッパ統合と文化・民族問題

連続講座　第1シリーズ　ヨーロッパ統合と文化・民族問題
── ポスト国民国家の時代の可能性を問う ──

フランス革命とヨーロッパ統合
── あいさつに代えて

西　川　長　夫

1

本日はお忙しいなかを大勢の方にお集りいただきありがとうございます。立命館大学の国際言語文化研究所では，これまでも共同研究や公開講演会，あるいは公開シンポジウムなどさまざまな活動をしてきましたが，今回，研究所の最も大事な事業の一つとして「連続講座」を開くことになりました。これはわれわれの日常生活に深くかかわりのある重要な国際的文化現象にかんして，1シリーズ4～5回の連続講座を公開で年に2度くらい（春・秋）開こうというものです。いま文化現象という言葉を使いましたが，ここでは文化という用語をかなり広い意味で使い，文学，芸術，哲学，宗教，科学といったいわゆるハイ・カルチャーを含むと同時に衣食住，あるいは風俗といったわれわれの日常生活の全体にかかわる諸現象を含むだけでなく，とかく文化と対置して考えられがちな政治や経済も人間の生活の営みの一つの形態として文化に含めて考えたいと思っています。そういうふうに広義の文化を考えているのですが，しかし他方ではいわゆる政治学や経済学といった国家の政策や制度にかかわる学問がとかく見落しがちであった，普通の人々の日常生活のなかのさまざまな様式や行動形態，楽しみや美意識あるいは価値観といったものに特別の注意を払いたい。

本研究所ではこれまで「ミニ講座」というものをやってきました。これは大学で学ぶことのできる外国語，例えば英語，ドイツ語，フランス語，中国語といった大国の言語には入らない，小さな国や地域の言語や文化を中心に講座を開こうというもので，例えばポーランド語，インドネシア語，朝鮮語，等々を対象にしてきました。そういうマイノリティーの問題を扱って行こうという姿勢が本研究所にはあります。こ

の度の連続講座は，この精神を受けつぎながら，しかしそうしたマイノリティーの問題を，もう少し広い視野のなかで考えてゆこうという意図をもっています。今回は国際地域研究所の賛同をえて，共催という形をとることになりましたが，これも特定の地域や限定された文化の問題をより広い視野のなかで考える試みのひとつと考えていただいてよいと思います。

今回の連続講座のテーマは，皆様にお配りしたビラに要約的に記しておきました。お持ちでない方もあるようなので読ませていただきます。

> 「ヨーロッパでは国境が消えようとしている。ヨーロッパ連合の試みは，ヨーロッパにおける経済や政治の形態を変えるだけでなく，住民たちの生活形態や意識と価値観の変化をもたらすだろう。国境の廃止は単なる交通の自由をもたらすだけでなく，主権，国家，国民，国籍，国語，民族，文化，アイデンティティなどといった国民国家の時代のキーワードの意味の変更をせまり，ヨーロッパ市民，多元主義，多文化主義といった新しい用語を呼びだしている。だがそれは国家をこえる試みであろうか。それともヨーロッパというより強力な国家を作ろうとする試みであろうか。沈滞と混乱の続くヨーロッパでいま何が起ころうとしているのであろうか。再生のためのこの壮大な実験は何をめざし，何をもたらすのであろうか。そしてそれは，われわれの未来にどのようなかかわりがあるのだろうか。」

この連続講座のテーマは「ヨーロッパ統合と文化・民族問題」でありますが，それに「ポスト国民国家の時代の可能性を問う」という副題をつけた理由は，いまお聞きいただいた文章によっておわかりいただけたと思います。では，なぜ「文化・民族問題」なのでしょうか。私たちがヨーロッパ統合の問題を，文化・民族問題に焦点をしぼって改めて考えてみたいと思うようになったのには，三つほどの理由がありました。

第一は，これまでヨーロッパ統合に関しては，あまりにも経済的な面に関心と情報が集中しすぎていて，これでは現在ヨーロッパで進行中の事態の正確で全面的な把握ができないということ。1950年の石炭鉄鋼共同体（ＥＣＳＣ）以来，現在の市場統合や通貨統合にいたるまで経済が主要な問題であることは言うまでもありません。だが経済問題の解決がこのような形をとること自体がヨーロッパ独自の歴史的伝統や政治的思想的背景あってのことであり，またこのような経済問題は当然住民の日常生活に深くかかわり，したがって文化問題に密接にかかわらざるをえないでしょう。

第二に，右のことに関連しますが，ヨーロッパ統合の問題を経済人や政治家たち，

あるいはテクノエリートの側からではなく，一般の住民，あるいは同じ住民のなかでもマイノリティーの人々から見た場合に，どのように見え，どのような意味をもつか。このような観点からは当然，文化・民族問題が重要になってきます。

第三に，ヨーロッパ統合が新たな段階をむかえ，欧州連合がさらに進展してゆくならば，これまで背後に隠されていた文化・民族問題が次第に表面化して，中心的な課題になってくるでしょう。これは言語や教育や宗教，等々の文化問題としてもあらわれるが，より直接的に民族紛争という形をとることも考えられる。そしてこうした文化・民族にかんする諸問題は，最終的には国民国家の変容，再編といった問題にゆきつかざるをえない。ヨーロッパ再生のために壮大な実験は，経済的な視角よりはむしろ文化・民族問題の視角から照明を当てたときに，より重要で本質的な意味をあらわすのではないでしょうか。

2

ここで本講座のテーマについて私自身の考えもまじえてもう少しくわしく説明させていただきたいと思います。このビラの裏側のプログラムの表の冒頭には，私の「あいさつに代えて」として「フランス革命とヨーロッパ」と記されています。これは二語脱落があって「ヨーロッパ」のあとに「統合」という文字が入るはずでした。それにしても「ヨーロッパ統合」についてなぜ「フランス革命」なのかという疑問をもたれた方も多いと思います。私の考えでは，ヨーロッパ連合の真の問題は現在行われているような経済中心の見方では理解できないし（もちろん経済は重要な中心的課題ですが），とりわけ文化と民族を扱う場合には，現状分析だけでは不十分です。かなり長い時間的なスパンのなかで歴史的に見なければ現在進行しているヨーロッパ統合の意味は理解できないのではないか。できれば中世から，少なくとも，フランス革命から現在までを一つのスパンとして見る必要があると思います。そしてこの問題は，「ヨーロッパとは何か」というあの，長いあいだくりかえされた問いにかえってくるでしょう。

ヨーロッパは，例えばアジアという概念にくらべればよほど明確な概念ですが，それにしてもヨーロッパと呼ばれる地域は，その境界をつねに変え，分裂と統合をくりかえしてきた地域であるということをまず念頭に置く必要があると思います。ヨーロッパは，民族大移動，つまり西ローマ帝国に侵入したさまざまな民族によって形成された地域ですから，もともと移民と多様な文化からなる地域であった。中世，12世界になって，政治的には分裂していたが文化的にある種の統合が成りたつ。つまり，

共通の宗教としてキリスト教が全ヨーロッパを支配し，またそれに関連して共通語のラテン語が聖職者や知識人のあいだにひろがる。パリ大学やボローニャ大学などの有力な大学にはヨーロッパ各地から学生が集ってくる。ナシオン（民族，国民）という語の起源の一つは，この各地から集ってくる学生たちに対して用いられた言葉から来ています。ルネサンス時代にはギリシャ，ラテンの文化がヨーロッパの共通の源泉とみなされることがありました。ルネサンスはイタリア趣味の全ヨーロッパ的流行をもたらします。また18世紀になるとフランス文化の影響が大きく各国の宮廷ではフランス語が用いられ，知識人の多く（ここでは活躍するのはフイロゾーフと呼ばれる哲学者たちです）がフランス語を媒介としていわゆる「文芸共和国」への共属意識をもつようになる。そうしたヨーロッパの歴史的伝統は，後世によって多分に神話化された部分もあると思いますが，それに対応する歴史的事実は存在するし，またヨーロッパ的アイデンティティやヨーロッパのイメージが問題になるときにはつねに想起される伝統があって，現在のヨーロッパ統合の動きを観察する場合にも，そのことを念頭に入れておく必要があると思います。

3

だが現在のヨーロッパ統合との関連で，歴史的にさらに重要で興味深いのはフランス革命です。この講座の副題は「ポスト国民国家の時代の可能性を問う」となっていますが，現在われわれがその中で生活している国民国家を最初に明確な形で作りだしたのはフランス革命である，と言ってよいと思います。したがってヨーロッパ統合の問題は，要約的に言えばフランス革命が作りだした諸問題を200年後にいかにして解決するか，つまりその一つの解決策がヨーロッパ連合ということになるのではないでしょうか。時間が限られているので，私はフランス革命について次の三点だけを指摘しておきたいと思います。

第一は，フランス革命勃発の報はヨーロッパ各地の知識人たちの間に熱狂を呼び起こしたということ。これは思想的な熱狂といって良いと思います。貴族や僧侶などの封建的特権に対する批判と告発，合理主義，市民的な自由，平等の理念，人権，デモクラシー，等々。18世紀啓蒙主義の展開あるいは実現としてのフランス革命という捉え方です。フランスの知識人は言うまでもなく，例えばドイツのカントやフィヒテの場合がそうです。こうした熱狂は革命の進行に対応してさまざまな形に変化してゆきますが，フランスにおいてもモンテスキュー・ヴォルテール流のコスモポリタン，つまり世界市民主義的な啓蒙主義からルソー的なナショナリズムに転化してゆく。他

方，イギリスのバークの反革命論のように，フランス革命が，より明確な保守主義を導きだすということもある。いずれにせよ全ヨーロッパが思想的に反応した。ということは先ほど言った「文芸共和国」のような一つの知的共同体が存在していたということでもあると思います。

国民統合の前提と諸要素

（1）交通（コミュニケイション）網，土地制度，租税，貨幣－度量衡の統一，市場……植民地	←経済統合
（2）憲法，国民議会，（集権的）政府－地方自治体（県），裁判所，警察－刑務所，軍隊（国民軍，徴兵制）	←国家統合
（3）戸籍－家族，学校－教会（寺社），博物館，劇場，政党，新聞（ジャーナリズム）	←国民統合
（4）国民的さまざまなシンボル，モットー，誓約，国旗，国歌，暦，国語，文学，芸術，建築，修史，地誌編纂	←文化統合
（5）市民（国民）宗教－祭典（新しい宗教の創出－ Michelet，伝統の創出－ Hobsbawm）	

第二は，フランス革命が生みだした最大のものは結局はかなり典型的な国民国家であったということです。ヨーロッパ統合の動きをずっと観察していると，それがフランス革命期の国民統合の過程に実によく似ている。

お手元の資料に，「国民統合の前提と諸要素」と題された表をのせておきました。これは最近出版された歴史学研究会編『国民国家を問う』（青木書店）の「18世紀フランス」の章にのせたものをコピーしてきたのですが，私の最初の意図は，フランス革命が実現した国家装置や制度あるいは国民的なシンボルの一覧表を作って，フランス革命を全体として理解するとともに，他の諸国の近代革命（例えば明治維新）との比較の基準を作ることでした。明治維新とフランス革命の話は別として，ここでこの表をもちだしたのは，このフランス革命の国民統合の過程が現在のヨーロッパ統合を見てゆく上でたいへん役に立つと思われるからです。

革命期における国民統合の前提としては，まず経済統合があった。つまりある程度の国内市場の形成で，当然のことながら貨幣や度量衡あるいは租税の統一が行われなければならない。これはいままさにＥＣ，ＥＵがやっていることです。次に国家統合とありますが，ヨーロッパを一つの共同体に作りあげる以上，一国の憲法に対応するものや議会，政府といった立法，行政機関，あるいは警察，司法制度などが必要で

す。また軍隊の問題を避けて通れない。これもいくらか違った形で現に進行している。第三に国民統合，これはヨーロッパ市民の権利義務，教育の問題に関連してきます。現在，加盟国民のパスポートは各国でなく，共同体（連合）が出しているわけですが，域内の自由な移動が認められた市民たちもどこかに登録されていなければならない。第四に文化統合，フランス革命はたいへん面白くて，まず革命（したがって国民）のシンボル作りを熱心にやった。ヨーロッパ共同体も同じように１２の星からなるヨーロッパ旗を作った（加盟国がこれ以上増えてもこの12の星はそのままにすえ置かれるようです）。国歌に対応するものとしてベートーベンの第９，「歓喜の歌」が定められている。わが国では年末になるとどこかからこの歌が聞こえてくることになっていますが，これからは用心しなければならない。「歓喜」はヨーロッパ連合の歌なのですから。その他国民に祝祭日に対応するものとして，５月９日が共同体（連合）の日に決められている。これはヨーロッパ統合の第一歩として1950年５月のシューマン・プランを記念するもののようです。第五に、国民統合の中心，あるいは理念の問題がある。フランス革命は王を処刑することによって国民統合の中心となるシンボルを自ら放棄したわけですが，フランスの政治はその後，王に代るべき統合のシンボルを生みだすのに大変苦労する。幾度かの王政復古があり，二度にわたるナポレオンの帝政があり，共和政が定着するまでに一世紀を必要としました。自由，平等，友愛というのは共和国のシンボルであり理念でもあるわけですが，それが統合の求心力になりうるかというと，必ずしもうまくいっていない。ヨーロッパ統合の場合は国民国家の場合に比べればゆるい統合ですから，逆に理念の重要性が出てくるのではないかと思います。そこでヨーロッパとは何か，ヨーロッパ人とは何かがその権利，義務だけでなく理念として改めて問われることになるでしょう。

それと関連して，国民統合にかんしてもう一つ最後につけ加えさせていただきたい問題があります。フランス革命で最も重要視されたのはどのような憲法を作るかということですが，その憲法の一つの焦点は，市民（国民）をどのように規定するかでした。いわゆる人権宣言と呼ばれるものは，正しくは「人間と市民の諸権利にかんする宣言」であって，人間と市民との諸権利が矛盾あるいは対立したものとして現われるという危険をはじめから含んでいます。少し具体的に言いますと革命の初期は，きわめてインターナショナルな傾向が強く，外国人も議員として選出する。また女性も街頭や革命クラブなどで大いに活躍した。ところが革命が危機的な状況をむかえいっそうラジカルになると，市民から外国人を排除しようとする傾向が強くなる。またそれと並行して市民から女性を排除して，女性を家庭にとじこめようとする傾向が強くな

る。そうした傾向が最後にはナポレオン法典として定着します。ヨーロッパ市民についてはどうでしょうか。これは興味ある問題です。

以上のように現在のヨーロッパ統合と200年前のフランス革命期の国民統合を比較すると数多くの類似点が指摘できます。これは何を意味しているのでしょうか。そこから導き出される一つの回答は，ヨーロッパ統合は，諸国家をより大きな枠組のヨーロッパという大国に置きかえた，結局は，大きな国民統合にすぎないのだ，というものです。そしてこのようなペシミステイックな意見は実際に出されていますし，それはそれでかなり説得的な面のあることは否定できません。だが私の真意はむしろこのような一つの歴史的な参照系を示すことによって，現在のヨーロッパ統合と国民統合との差異をもう少し厳密に考えてみたいということです。何が新しい試みであるのか。ヨーロッパ統合の国民国家をこえる新しさと可能性はどこにあるのか。

例えば国語の問題があります。フランス革命は最初地方語を尊重し，パリで出された法令を地方語に翻訳することを義務づけました。しかしやがてこれも革命が進行するにつれて，地方語を抑圧しパリのフランス語を国語として強制的に押しつけます。当時いわゆるフランス語を使い理解できたのは人口の三分の一くらいですからこれはたいへんな抑圧でした。ヨーロッパ連合が一つの言語を全ヨーロッパに強制するということは考えられません。ヨーロッパ連合は多言語，多文化主義をとらざるをえないとすれば，それはどのような形をとるのでしょうか。そうした興味深い問題を皆さんはこれから五回にわたる講義できかれることになると思います。しかしまたくりかえしになるかもしれませんが，われわれは他方では国民国家の時代の長い習慣や思考法に慣れてしまっているので，何か新しいことをやろうとしてもつい昔の癖が出てしまう，あるいは古い考え方で判断してしまう，そういうことに対する配慮や用心も必要だと思います。

4

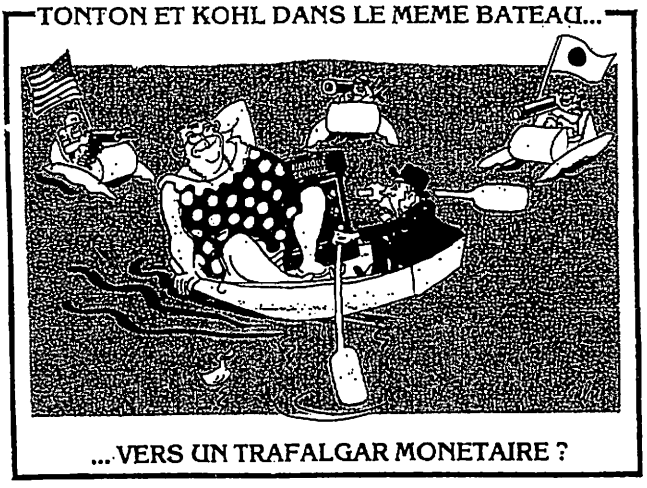
フランス革命にかんして言うべきことがもう一つ残っていました。第三点は，フランス革命が結局はナポレオン帝政に行きついたということです。フランスの国民国家形成は，結局はナポレオン体制のなかで形を整えることができたのであり，またフランス革命の理念が全ヨーロッパにひろがったのはナポレオン軍とともにであった。これはフランス人も他の国の人たちもあまり言いたくないことのようですが，忘れてはならない歴史的事実だと思います。ナポレオン帝国は十年ほどの間にすぎませんが，イギリスを除くほとんど全ヨーロッパを支配し，その版図はほとんどローマ帝国に匹

敵する。これは事実上のヨーロッパ統合です。そしてナポレオン自身は，イギリスを敵として大陸封鎖を行うなかでヨーロッパ連合的なアイデアをもっていたようです。ナポレオンはヨーロッパ連合の先駆者かもしれません。ドゴールはそのことを意識していたし，ミッテランも口には出さないがそのことに無関心ではないと思います。

だがさらに重要なのはその後に起こったことです。ナポレオンの支配はヨーロッパ各地に民族主義を呼び起こした。フランス軍の兵士たちにとってこれは意外なことでした。なぜなら彼らは主観的には，諸王の専制に苦しむ人民を解放し，彼らに平等と自由を与えるつもりでいたのですから。フランス軍は解放軍として迎えられもしたが，やがて手ひどい反撃をうける。例えばスペインのように政治的宗教的抑圧に苦しんでいるはずの人民から思いがけない抵抗をうける。こうしてヨーロッパの国民国家とナショナリズムの時代が始まり，国境線の変更をめぐり，王ではなく国民の名において戦われる，戦争の時代が200年続きました。

以上はヨーロッパを主として内側から見てきたわけですが，最後に外側から，あるいは世界システムの側から見たヨーロッパについてふれておきたいと思います。16世紀以来，象徴的に言えばコロンブスのアメリカ発見以来，ヨーロッパは世界の支配者であり世界システムの中心でした。第二次大戦後に主導権はアメリカに奪われるとしても，それまでの400年間は世界の中心であっただけでなく，世界をまきこみ世界を西欧化する中心であった。ユーラシア大陸のこの小さな半島が，少くとも自己意識においてはほとんど世界と等価なものとして存在していたと思います。ようやく第一次大戦後になってヨーロッパは自己の明らかな衰退を自覚し，ヨーロッパはユーラシア大陸の単なる半島にすぎないのではないかと自問するようになる。ポール・ヴァレリの「精神の危機」(1919年) はその一例です。だがそのことが現実的な問題として痛感されるようになったのは，第二次大戦後のことです。ヨーロッパ統合とは，そうしたヨーロッパの自己意識の経済政治文化面における具体的表現であるとみなすことができると思います。お配りした資料にフランスの風刺新聞『カナール・アンシェネ』からとった戯画をのせておきました。お分りのように，中央には女装をした巨大な体格のコール首相と中央銀行の金庫をのせた小舟を小さな老人のミッテランが漕いでいます。まさに呉越同舟なのですが，この小舟を三方から，アメリカ，アラブ，日本の機関銃やバズーカ砲が狙っている。タイトルには「通貨のトラファルガーへ？」と記されています。トラファルガーは言うまでもなく1805年のトラファルガー沖会戦のことで，このときフランス・スペイン連合艦隊はネルソンの率るイギリス艦隊に破れて，制海権を失い，ナポレオンの世界制覇の野望は粉かれて，やがて覇権をイギリス

に譲り渡すことになった事件です。このカリカチュアはたしかマーストリヒト条約の国民投票の直前の新聞に出ていたものだと思います。ついでながら，この三つの仮想敵のなかでも最も目立っているのが日本（日の丸）であることにご留意下さい。だがそれにしてもヨーロッパがこのような図像で描かれるようになったことは感慨を禁じえません。この絵に見るかぎり，ヨーロッパ統合は実に危い危険な賭であるようです。



ヨーロッパ統合はわれわれ日本人から見ても他人事ではありません。日本が仮想敵国とみなされていることもその理由の一つでありますが，より根本的にはかつてヨーロッパが世界をまきこんで発展した結果，われわれは多少とも西欧化されており，いまではヨーロッパの問題は深いところで即われわれの問題になっているからです。ヨーロッパの再生の試みは，現にわれわれ自身が直面している諸問題あるいはやがてわれわれ自身が直面する危機の予告と解決策の模索であるかもしれない。その意味ではヨーロッパはこうした防御的な形ではあれ，やはり世界のイニシアチブを取り続けようとしているのではないでしょうか。

ヨーロッパ統合の問題は深くて複雑です。今日はこのヨーロッパの変貌という問題に長い間かわってこられて，わが国ではおそらく最も深い理解をもっておられる宮島喬先生においでいただきました。今日は最初ですからヨーロッパ統合と文化・民族問題の全体的な構図といいますか，問題のありかをお話しいただければ幸です。どうかよろしくお願いいたします。

（連続講座第１シリーズ／第１回1994年10月７日㈮／末川記念会館）